東北地方太平洋沖地震による被災者に対する支援に関する条例が施行されました

この条例は、平成23年３月11日に発生した東北地方太平洋沖地震により被災した方が、早期に健康で安全な生活を取り戻すことができるよう、町として支援することを目的として施行されました。

問総務課　☎84－0310

【支援の内容】

① 生活物資を被災市町村へ提供します
② 被災者を受け入れるため、町内公共施設を避難所として開設します
③ 被災者に町営住宅等を提供します
④ 町内にお住まいの被災者に見舞金として１人２万円を支給します
⑤ 町内にお住まいの被災者の就学、就園等を支援します
⑥ 被災市町村からの要請があれば、復旧支援のため職員を派遣します

▲町民の皆さんから提供された救援物資

【町民の方の協力や支援についてのお願い】

町民の方や町内の事業所には、被災者が健康で安全な避難生活を送れるよう、自主的に町と協力して被災者の生活環境を維持するための協力や支援をお願いします。

平成23年4月1日から『神奈川県暴力団排除条例』『開成町暴力団排除条例』が施行されました

問環境防災課　☎84－0314

地域から暴力団を排除するため、神奈川県の条例では県、県民と事業者の役割を明らかにし、開成町の条例では町や町民が暴力団排除に自主的に取り組む団体とお互いに連携や協力をして安心して暮らせるまちづくりをめざすために条例が制定されました。

【条例制定に至った背景】

暴力団は、近年、資金獲得活動や民事介入暴力、行政対象暴力などに加え、組織実態を隠ぺいしながら、建設業、金融業といった事業活動に進出するなど、一般社会での資金獲得活動を活発化させています。

また、公共事業への介入や、各種公的給付制度等を悪用した詐欺事件など、多種多様な資金獲得活動を行っています。

「神奈川県暴力団排除条例」と「開成町暴力団排除条例」は、社会にとって脅威となっている暴力団の排除を推進する意思を明示し、安全に安心して暮らすことができるまちづくりをめざして制定されました。

【開成町暴力団排除条例の主な内容】

1　基本理念

- 暴力団を恐れない。
- 暴力団に協力しない。
- 暴力団を利用しない。

2　町の責務

- 暴力追放運動推進センターと協力・連携して暴力団排除を推進します。
- 県が行う暴力団排除に関する施策に必要な情報の提供などの支援を行います。

3　町民の役割

- 暴力団の排除活動への参加や暴力団排除に役立つと思われる情報を積極的に、警察へ通報する。

4　町の施策

- 町は、暴力団と契約しません。
- 町は、暴力団に給付金などを交付しません。
- 暴力団の活動の利益となる行事には、町の施設を使わせません。
- 町は、町民の皆さんが暴力団排除に積極的な役割を果たすことができるよう、情報の提供や必要な支援を行います。

■通報および相談

暴力団に関する通報やご相談は、次の窓口や警察署や交番、駐在所などで受け付けています。

■神奈川県警察本部
暴力団対策課
☎0120－797－049

■神奈川県暴力追放
推進センター
☎045－201－8930

■松田警察署
☎82－0110

子育てワンポイント 85

Q 3歳になっても指しゃぶりがやめられないのです。

A 指しゃぶりは、子どもにとって、心の安心感につながる行為かもしれません。

大人には気になりますが、小学生になるころには、自然にしなくなるケースが多いので、退屈にしているときや眠いときに指を吸う程度であれば、無理に止めさせる必要はないかもしれません。

また、指しゃぶりが頻繁で、指にタコができてしまったり、指先がふやけてしまったりした場合でも、「やめなさい」と強い口調で注意すると余計に意識してしまいますので、逆効果です。

それよりも、何かに集中して遊んでいるときに指を吸っているようであれば、そっと手を口から外したり、両手を使う遊びに誘ったりするなど、自然に指しゃぶりから意識を遠ざけるように心がけて接してあげると良いでしょう。興味を他へ向けるような声かけの方が効果的のようです。

特に眠いときに指を吸ってしまう子には、寝つくまで、そばにいて絵本を読んであげたり、手を握って安心させたりしてあげると良いでしょう。

問開成町子育て支援センター
☎82－1222

生き生きしポート 子どもたちは今 119

「困難から成長へ」

文命中学校教諭　矢野貴義

文 命中学校に勤務して３年目になりました。現在は二年生の担任と理科を教えています。

三 月十一日の大震災があったとき、文命中学校で授業中でした。私は職員室で仕事をしていたので、町内放送から流れた全国瞬時警報システムの緊急放送を耳にし、揺れに備えることができました。揺れが収まったことを確認し、職員室にいた職員で手分けをし、生徒の様子を確認するため教室に向かいました。

生 徒たちは各教室で机の下に入り余震に備えていました。「本当に終わりかと思った」と涙ながらに話す子や、お互いに手を取り励まし合っている子もいました。その後、防災訓練の経験をいかし、速やかにグランドへ移動することができました。

週 が明け、徐々に地震と津波の被害の様子がわかってくると、生徒たちは余震を恐れると同時に、被災された方への想いを募らせていました。「被災された方は、家族や家を失い不安の暗闇の中にいると思う」とか、「真っ暗で寒い中、必死に戦っている」など心を痛めていました。その後、生徒たちの考えに変化が見られました。それまで多かった同情から『今自分たちには何ができるのだろうか』という声に変わっていったのです。そして生徒会に働きかけ、募金活動が始まりました。

自分のお小遣いから千円札を三枚募金した男子に話を聞くと『今、僕には募金しかできないから貯金箱から持ってきた。』と答えました。

そ の後、四月六日に本校の体育館で無事入学式を執り行うことができ、新たに一六五名の生徒が希望を胸に入学することができました。

式中の新入生代表の言葉の中でこのような言葉がありました。「現在震災によって多くの人が被害を受けました。（中略）私たちは生きている。そのことに感謝して生活していきたいです。」在校生含め会場にいた人たち全員が真剣にその話に耳を傾けていました。

生 徒たちは今、日本が直面している問題を真摯（しんし）に受け止め、一歩一歩前に進もうとしています。中学生には、大人が不在の昼間の災害等には、地域を支える大きな役割があります。生徒たちの持つ優しい心を伸ばすと共に、今後も思考力と行動力が身に付くよう取り組んでいきたいと思います。